View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

『松浦宮物語』における唐土
～先行する物語・説話との比較から～

China in “Matsuranomiya monogatari”
～A Comparison with the Antecedent Tales～

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学
亀　田　　慎
Makoto Kameda

１．はじめに

筆者は以前、『松浦宮物語』（以下『松浦宮』）の主人公氏忠に対する唐土の人びとの態度や発言に注目し、そこから作品の成立時期を探った[1]。『松浦宮』において、唐土の文皇帝・鄧皇后は氏忠を厚遇し、対して廷臣らは氏忠の才能に嫉妬の念を燃やして画策し、氏忠はそれに反抗することもなく静かに忠誠を尽すのみである。本稿ではこの主人公の待遇に着目し、先行物語を確認することから始めたい。中世王朝物語は、かつて擬古物語とも称されたように、先行する何らかの物語から表現を自らの物語に用いる、あるいは摂取し変奏するといった手法が執られているのが特徴の一つとされる。無論、『松浦宮』もその例に漏れない。冒頭には『宇津保物語』（以下『宇津保』）や『浜松中納言物語』（以下『浜松』）ほかからの摂取が見られ、全体の展開についても『浜松』に似通うところが少なくない。そのため、『松浦宮』の主人公の待遇が単なる摂取であるか否かの確認は必要事項である。『松浦宮』の時代には既に唐の国はなく、宋に移り変っており、唐の国は愈々幻想的な風情を醸し出す世界として、日本の文化の中に吸収されていった。『宇津保』『浜松』『松浦宮』は、同じ唐という国を舞台にしながらも、姿を異にした人間模様が描かれ、その異なる人間模様にこそ定家が思い描いた「もろこし」の一つの姿を見出すことができると筆者は考えている。

『浜松』については『無名草子』で「あまりに唐土と日本と一つに乱れ合ひたるほど、まことしからず[2]」と酷評を下されているのであるが、対する『松浦宮』からは作者である藤原定家の漢籍の素養のほどがひしひしと伝わってくる。史書を紐解き実在の人物を参考にして物語の登場人物の名前を付けたというその執心ぶりからは、『無名草子』の評言と同じようなことを、定家は感じ取っていたのではないかとすら思わされる。では『松浦宮』は『浜松』の日本的な唐土からの脱却をはかり、唐土の実態をそのまま描いたと考えるべきかというと、そうではなく、やはり定家の内に秘めた理想が込められた唐土が描かれていると考えるべきだろう。問題はその理想が何であるかだが、筆者はこれを、人材を才能によって登用する聖君の存在にあると考えている。本稿の前半では先行する遣唐使の物語

および『松浦宮』の人物像を見つめなおし、後半では『無名草子』の本文、および定家の和歌の「もろこし」がどういったものであるかを見ていくこととする。

２．『宇津保』『浜松』の主人公の待遇

『宇津保』ではどうかを見ていこう。俊蔭は遣唐使として派遣されながら、船が難破し流されてしまったがために、波斯国に辿りつく。阿修羅から琴を、仙女達から秘曲を伝授され、仏から過去世の因縁と未来の予言が語られる。その後に日本国へ帰る決意をした俊蔭は、船で渡り波斯国の帝に謁見する[3]。

〔一〕その国の帝、后、儲の君に、この琴を一つづつ奉る。帝、大きにおどろきたまひて、俊蔭を召す。参れるに、ことのよしを詳しく問ひたまひてのたまはく、「この奉れる琴の声、荒きところあり。しばし弾きならして奉れ」とのたまふ。「人の国の人なれば、渡りて久しくなりにけり。そのほどはいたはりて候はせむ」とのたまへば、俊蔭申す、①「日本に年八十歳なる父母侍りしを、身捨ててまかり渡りにき。今は塵灰にもなりはべりにけむ。白き屍をだに見たまへむとてなむ、急ぎまかるべき」と申す。②帝、あはれがりたまひて、いとまを許しつかはす。

（３９頁／下線は筆者による。以下同様）

帝は俊蔭に好意的である。しかし全体としてやりとりは実に単調であり、②にあるように俊蔭の境遇を「あはれがりたまひ」て、皇帝はあっさりと帰国を許すのである。①に語られる俊蔭の孝行の程を強調するために、一国の皇帝の心が動かされた様子を書き入れたと見える。皇帝の振舞は俊蔭の孝を前提としたものと見た方が良いであろう。用例としてはこの一つのみである。波斯国の皇帝とはそのための存在でしかない。

次に『浜松』ではどうか。夢で亡き父が唐土で親王として転生していると知った中納言は、様々な恋の悩みと継父・実母への複雑な思いに苛まれていた日本を飛び出すことを決意する[4]。

〔二〕明くる日、この関に御迎への人々まゐりたり。そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じ事なり。日本のてんふ渡いて関をいるゝに、①中納言ひきつくろひて、いみじく用意し給へるかたちありさま、光るやうに見ゆるを、②この国の人々めづらかに見たてまつりおどろきて、めでたてまつる事かぎりなし。昔のわうかくしやうの居けるかうそうに、中納言のおはしまし所、③心ことに玉をみがき、かゝやくばかりにしつらひて据ゑたてまつる。（上巻・４頁）

①中納言は礼儀正しく、只ならぬ気配りの程を見せる。その態度が「この国の人々」の感動を得る。②「めでたてまつる事かぎりなし」としているのはまだ良いとしても、礼儀と気配りに対する小さな感動の割に用意されたもの（③）はかなり大仰である。中納言が国を隔てて人に認められる人徳を備えていた事を、やはり強調するための表現であろう。

〔三〕帝卅ばかりにて、顔かたち、いみじくうるはしくめでたうおはします。①中納言のありさまを御覧ずるにたぐひなし。②そこら集ひたる大臣公卿、「日本はいみじかりけり。かゝる人のおはしましけるよ」とおどろきて、「いにしへ、河陽県に住みけるはくかんこそは、我世にたぐひなきかたちの名をとどめたるも、愛敬のこぼるばかり匂へるかたは、さらにかゝらざりけり」と定めけり。③題を出して文を作り、遊びをしてこゝろみるにも、この国の人にまさるはなかりけり。「この人の事をこそ見ならひとむべかりけれど、このことゝては、何事をかは中納言には伝へならはすべき」と、④帝もおぼしめしおどろきて、たゞこの中納言を、朝夕にもてあそびなづさひたてまつるに、いみじう憂へをやすめ、思ひをのぶる事に思へり。（上巻・１５頁）

〔四〕⑤御子たち大臣公卿あつまりて、文作り遊びをし給にも、此中納言にしくものなく、⑥「めづらかにいみじかりける世の人かな」と、御門をはじめたてまつりて、あるかぎりの人、めづらしがる事かぎりもなし。（上巻・３４頁）

繰り返して同じような事を表現しているため、並べて見たい。①「中納言のありさま」の「たぐひな」き事に感じ入ったのか、②「大臣公卿」は大層驚き、美男子として後世名を残した「はくかん」（藩岳）に代わる人物のように見ている[5]。③④と⑤⑥は同じような展開である。③⑤中納言の漢詩、管弦の遊びの才能に、唐土の人々は敵わなかった。④帝は「朝夕にもてあそびなづさひたてまつる」様子であり、不思議と是に嫉妬するような廷臣もいない。⑥では「御門」はおろか「あるかぎりの人」が総じて中納言に称賛の声を挙げていることが窺い知れる。

総じて中納言の才覚に皇帝も廷臣も驚くばかりで、嫉妬などと言うものは終ぞ見られない。仕舞いには中納言を婿にと願う「大臣上達部」達の話までも持ち上がる。これを契機に以後は恋愛譚へと移り進んでいくのである。贔屓目で見るのではなく、客観的に中納言の才覚を認める大臣も帝も、所詮は中納言の素晴らしさを強調するために活用されているに過ぎないのであろう。

３．『江談抄』「吉備入唐の間の事」を読む

才能あふれる主人公に嫉妬する唐国の人々、という点においては『宇津保』も『浜松』もその先例とみなすことはできないだろう。では『松浦宮』で初めてなされた物語展開であるかといえばそうで

はなく、唐国の人に嫉妬される遣唐使を描いた作品は確かに存在する。『江談抄』第三巻雑事「吉備入唐の間の事」がそれである。吉備真備が入唐してその才覚によって難を逃れる話で、人物の才覚の尋常ならざる事を伝えんという目的意識が内在するがために、やや大袈裟で奇瑞譚的である。『無名草子』風にいえば「まことしからぬ」所がある説話だが、その原因が説話の意図にあると思えば、また説話の内容から考えてみても、比較対象として挙げることで『松浦宮』の意図を探ることにもなろう。この吉備入唐説話の『松浦宮』への影響関係については久保田孝夫氏が発表しているのではあるが[6]、『松浦宮』で見られる主人公の異能ぶり、それに嫉妬する唐国の廷臣、主人公を擁護する為政者というこの三点に注目した場合、この説話の内容は細かに読み返す必要がある。

説話は真備が唐土に渡ったところから始まる[7]。

〔一〕①吉備大臣入唐して道を習ふ間、諸道、芸能に博く達り、聡恵なり。②唐土の人すこぶる恥づる気有り。密かに相議りて云はく、「③我ら安からぬ事なり。まづ普通の事に劣るべからず。日本国の使到来せば、楼に登らしめて居しめむ。この事委かに聞かしむべからず。また件の楼に宿る人、多くはこれ在り難し。しかれば、④ただまづ楼に登らせて試みるべし。偏へに殺さば忠しからざるなり。帰さばまた由なし。留まりて居らば、我らのためにすこぶる恥有りなん」と。楼に居しむる間、深更に及びて、風吹き雨降りて、鬼物伺ひ来たれり。（６３頁）

もはや厚遇などとは程遠い話の切り出しであろう。①如何に吉備真備が「諸道、芸能に博く達り、聡恵」であっても、②「唐土の人」にしてみれば面白くない。「恥づる気有り」とは一見、真備の実力に称賛を与えるような雰囲気を醸し出すが、ここは全く逆の、嫉妬を意味する。③国の名譽を考えても「安からぬ事」であるし、日本国に負けてはならぬという自信が、「普通の事に劣るべからず」という考えを起させているのであろう。④「楼に登らせて試みる」ことの本心は実に賤しい。死なせてしまおうという魂胆が見え隠れする。「偏へに殺さば」忠に背く行いではあるし、真備を「帰さば」よろしくないことになる。かと言って真備がこのまま国に「留まりて居らば」、自分達にとっては害以外の何物でもない。自然死に託けて殺してしまおうという心積もりであろう。この展開は確かに『松浦宮』にも見られるために興味深い。

楼に登り、閉じ込められた真備は鬼と出会う。

〔二〕鬼まづ云はく、「我もこれ遣唐使なり。我が子孫の安倍氏は侍るや。この事聞かんと欲ふに、今に叶はぬなり。我は大臣にて来て侍りしに、①この楼に登せられて食物を与へられずして餓死せしなり。その後鬼物と成る。（６４頁）

この鬼は、かの阿倍仲麻呂が同様の待遇を受けた成れの果てである[8]。待遇の由縁は語られずとも、先の「唐土の人」の言葉を読んでいれば容易く想像できよう。①「食物を与へられずして餓死」した過去の経験談からは、「唐土の人」の妬みと殺意がどれほど深かったかが想像され、また真備にどれだけ危機が及んでいるかを推し量ることができる。

〔三〕その朝、楼を開き、食物持て来たるに、鬼の害を得ずして存命す。唐人これを見ていよいよ感じて云はく、「希有の事なり」と云ひ思ひしに、その夕、また鬼来たりて云はく、「①この国に議る事あり。日本の使の才能は奇異なり。書を読ましめて、その誤りを笑はんとす」と云々。（６５頁・／傍線筆者）

〔四〕また聞きて云はく、「唐人議りて云はく、『②才は有りとも、芸は必ずしもあらじ。囲碁をもつて試みんと欲ふ』と云ひて、③白石をば日本に擬へ、黒石は唐土に擬へて、『この勝負をもつて日本国の客を殺す様を謀らんと欲ふ』」と。（６６頁）

あれこれと「唐土の人」は画策してみる。命を永らえた真備を今度は笑い物にしてしまおうと狙う。①よほど「日本の使の才能」を恐れているらしく、「誤りを笑はん」と企むとは、何とも子供じみた計略であろうが、彼らからしてみれば名誉を守るためであって必死の思いである。しかし、それも「鬼」が機転を利かせて失敗に終わる。となると次には、②「芸」すなわち「囲碁」で対抗しようと企む。読者からしてみれば既に「諸道、芸能に博く達り、聡恵なり」とあったのだから、勝負は目に見えている。いよいよ此処まで来ると「唐土の人」の謀はあからさまになって来て、③白石を日本に、黒石を唐土に「擬えて」、つまりは白石が負ければ「日本国の客を殺す」つもりでいると言うのである。

〔五〕持にて打ち、勝負なき時、①吉備偸かに唐方の黒石一つを盗み、飲み了んぬ。勝負を決せんとする間、唐負け了んぬ。②唐人ら云はく、「希有の事なり」と。「極めて怪し」と云ひて、石を計ふるに黒石足らず。よりて卜筮を課みて占ふに、「盗みて飲めり」と云ふ。推ひて大いに争ふに、腹中に在り。しからば瀉薬を服せしめんとて呵梨勒丸を服せしむるも、止むる封をもつて瀉さず。遂に勝ち了んぬ。③よりて唐人大いに怒りて、食を与へざる間、鬼物夜毎に食を与へ、すでに数月に及べり。（６７頁）

こうまでされて黙っている真備でもない。①「唐方の黒石」を盗んで飲み込んでしまったのである。数が足りないのだから、実力が拮抗していたとしたら唐方が負ける。②唐人は素直に認めることが出来ない。どうにも「怪し」と思って、石を数えるまでに執着を見せる。結果として石を飲んだ事が発覚した。しかしどうにもならない。勝負は唐方の負けである。③いよいよ唐人は「大いに怒りて」食

を断ってしまったのである。始めこそ「忠しからざる」ことを憂慮していたが、こうなれば言い分としては成り立つのだから、何も憚る必要もあるまい。しかし、真備は生きていた。鬼が助けていることが露見し、遂には結界を張られ、今度こそ「文」すなわち『文選』を読ませ恥をさらさせようと目論んだ。

その場で真備が「本朝の仏神」に懇願を立てると、蜘蛛が降りてきて、糸を引いてそれを頼りに読むと読めてしまうのである。ちなみに「仏神」の注には「神は住吉大明神、仏は長谷寺観音なり」と記されている。日本の仏神の霊験が唐土にまで行き届いた事を暗に伝えんとするものであろう。ともあれ、「唐人」の目論見は悉く敗れ去ったのである。

〔六〕①帝王ならびに作者もいよいよ大いに驚きて、②元のごとく楼に登らしめて偏へに食物を与えずして命を絶たんとす。「今より後楼を開くべからず」と云々。（６８頁）

それまでは廷臣のみの行動のようにして為されてきた種々の謀であったが、①そこに「帝王」が加わっていたことがここで明らかになる。②鬼の助けも叶いそうにもなく、とうとう絶望の淵に立たされるのであった。

だが、真備はその後、鬼に「双六の筒・簺盤」を用意してもらい、彼が「簺を枰の上に置きて筒を覆ふ」と、忽ちに「唐土の日月」が封じられてしまうのであった。人々は「大いに驚き騒」いだという。占わせれば真備の楼が怪しいと出る。問い質してみれば、「一日、日本の仏神に祈念するに、自ら感応有るか。我を本朝に還させらるべくは、日月何ぞ現れざらんや」と述べる。こうなってしまえば、もはや詮方ないのであって、真備は帰朝を許されるのである。

以上、全体を通して真備の待遇を見てきたのであるが、廷臣や帝王の振舞は真備の才覚を恐れてのものである。ここに主人公を擁護する唐国の人間は描かれない。説話の意図を考えれば、真備の才能の程を読者に訴えかけるために設定されたもの、と考えることも出来よう。説話はその伝えんとする内容のために、誇張や強調が見られる事も注意せねばならず、これらの「唐土の人」の態度が「吉備大臣」という人間の才能・魅力をより高いものへ、より印象づける効果を生んでいることは言うまでもない。森克己氏はこの説話を通して、

> 遣唐使廃絶後、宋商人の一方的な来航によって保たれてきた海外交通に、新たに日本の商船も進出するようになった。したがって高麗・宋へ渡航した商船によって海外の事情ももたらされ、また遣唐使時代の輸入文化も全く消化され日本化して、わが文化は必ずしも大陸の文化に劣るものではないという自信をもつようになって来た。

と指摘しているが[9]、その優劣をすぐに中世王朝物語の全体に当て嵌めるわけにはいかないであろう。

少なくとも『松浦宮』は違うと筆者は見ているのであるが、その確認のためには『松浦宮』の本文に再び目を通し、どのように唐土が描き出されているかを見ていく必要がある。

４．『松浦宮』に描かれる唐土

『松浦宮』の本文に触れて行きたい。唐の廷臣は一面、随分と嫉妬深く狡賢く謀略的な人間に描かれているが、それだけが唐という国を又国の人間を表すものではない。「国の習ひ」に五月蝿い廷臣を「わづらはしかるべけれ」と氏忠も感じているのであるが、氏忠の思いがそれだけではない事にも目を通さねばなるまい。

〔一〕少将は、さまざま忘れぬ面影添ひて、うち涙ぐむ気色を、①**知らぬ国**の人もあはれと見て、旅寝も露けかるまじう思ひおきてつつ、かまかに心しらへば、宰相もかたみに文作り交して、興ありと思へれば、②かくめづらしき人の出で来添ふを、**なほかしこき国と思へり**。（２９頁）

〔二〕③なにごとも、すべて**本の国の人**、及びがたくのみあるにつけて、人はめざましう思ふかたもあれど、（３１頁）

〔三〕いたはらせたまへど、④**国の習い、いともきをりにことごとしくて、**いささかの違ひ目あらば、かならず重き過ちとなりぬべきを見るに、心を添へて慎みたれば、ただひとり寝をのみして、秋にもなりぬ。（３３頁）

①「知らぬ国」に注目したい。唐土であればこそ「知らぬ国」の人であるのだが、後にも触れるように、この「知らぬ」という言葉が重要な役割を担っている。氏忠は唐土という国を知らずにいたのであり、知らぬ事が、氏忠をして目に映る何もかもを新しく感じさせるのである。漢籍で触れていただけの幻想の世界が、目の前に広がる。鳥も花も女性も見目麗しく、新しく感じ取るのである。それは物語全体を幻想的な世界に誘う作用を起こすのである。その人々は、氏忠に対して友好的である。氏忠の心を察して「あはれと」感じて親切に細々と心遣いをするのである。

②対して唐土の人々の氏忠・宰相に対する印象も良い。宰相は唐土の人々の厚遇に感謝して、詩をやりとりする。氏忠は文をやり、管弦の遊びをしているので「かしこき」事は知ったのだが、その周囲の人間もかくまで「かしこき」人であるとは、日本という国は「なほかしこき国」であるものだ、と唐土の人々は感嘆するのである。

③だが､廷臣ともなれば氏忠の賢さを良くは思わない｡立場の違いを作者は上手く対比させている。「本の国の人」は廷臣であり、恐らくは漢詩等の文化の大本という意味で作者は用いているのであろう。その文化の原点の人々も「及びがたし」であるのだから、氏忠の才能は最たるものである、が、同時に「本の国の人」としての誇りを傷つけてしまう。廷臣の嫉妬は此処にある。

大人しくしていなければ何が起きるか判らないと氏忠は察した。④氏忠の見た「国の習ひ」は言うまでもなく廷臣の態度である。少しでも違う様子があれば彼様にまで批判が出るのだから、自分から「国の習ひ」に反する行為をすれば罪も重いであろうとしている。氏忠の廷臣に抱いた印象は悪い。しかしながら、印象が悪いのはあくまでも廷臣に対してであり、氏忠は誰をも劣っているとは見ていない。

〔四〕そこはかとなくにほひ出づるかをりの、なつかしう身にしむこと、「**国の習ひにや、またかかる人もありけり**」と驚かるれば、まづところのさまもゆかしうて、右につきてまはり見れど、すべて人のけはひもせず、見る人をあやしと問うこともなし。（８７頁）

これは仮称「簫の女」（母后の分身）に出逢った場面であるが、同じ「国の習ひ」でもここにおいては好印象を引き出す。日本国にはいないような女性の「かをり」が「なつかし」く感じられる。氏忠は女性を通して唐土を見改めるのである。ちなみに、氏忠が華陽公主、簫の女に出逢う時、必ずその前に出逢った女性が対比され、華陽公主との出逢いでは神奈備皇女を思い出している。

〔五〕うち見るより物おぼえず、そこら見つる舞姫の花の顔も、ただ土のごとくになりぬ。古里にていみじと思ひし**神奈備の皇女**も、見あはするに、鄙び乱れたまへりけり。（３９頁）

神奈備皇女を「古里」にては「いみじ」と感じていたのだが、それは華陽公主に見比べてみれば「鄙び乱れたまへりけり」と、敬語を遣いながら言っている内容は悲惨なものだ。それは唐土の風土によって、「古里」を懐かしむ悲壮感がそうさせた訳ではない。純粋に唐土の女性、華陽公主の美しさが氏忠をして神奈備皇女を「忘れ」させるのである。

〔六〕①ただかかる契り一つにや、げに琴に引かれ来にける身と思ひ知らるるには、②もとの国人、情ばかりの言の葉だに絶えて、うち忘れたまへるに、③**神奈備の皇女**、「あやしうも変りはてにける心かな」と、ねたうおぼすにや、（１３４頁）

①「契り一つ」だけで、本当に「琴に引かれ」て現れた華陽公主の、その氏忠への思いの程を思い知った後となっては、②「もとの国人」に対しては情愛も薄れてしまったのである。もはや未練もない。帰国しての記憶喪失と捉える見方もあるが、それは違う。帰国したからではなく、華陽公主の思いの丈を知ったからこそ、かつて慕った女性達への未練が消え失せてしまったのである。②はその氏忠の

有様を神奈備皇女の視点から見た表現である。氏忠は神奈備皇女に薄情になってしまい、③「あやしうも変はりはて」てしまったのである。神奈備皇女としては妬ましい。「忘れたまへる」が神奈備皇女の視点から見た表現であるとする理由は、直後の彼女の和歌にもある。

〔七〕もろこしや**忘れ草**生ふる国ならむ人の心のそれかともなき（１３４頁）

前半で知らぬ国のことに思いを馳せ、後半で目の前に現実にいる氏忠に対する皮肉を訴える。「人の心」（氏忠の心）が神奈備皇女を見ても、それと判らぬようになってしまった、としているが、勿論これは、忘れたように冷たくなっている氏忠への皮肉である[10]。

話を戻そう。主人公が廷臣達の嫉妬を買いながらもそこにいられたのは、皇帝の態度にあったことについては既述した。概して皇帝の政治は賢王の御代として表現されており、そもそも初めての謁見においてさえ、

〔八〕ほどなく召しありて、都に参るほど、はるかに遠き山、河、野原を過ぎ行けば、きびしき道、さがしき山を越えつつ行くに、五月の雨晴れず、いとど笠宿りもわづらはしけれど、都に参りぬれば、このころ、御門三十余ばかりにて、**いみじき聖の御代なり**。（３０頁）

都までの道のりの「きびしき」、又「さがしき」様子と、都の雰囲気が対比されている。軒下や木陰に雨宿りまでして辿った道のりは、氏忠にとってはとても「わづらはし」いものであったが、都に着いてみれば、そのような心も吹き飛んだ。その由縁を作者は「いみじき聖の御代」にあるとしているのである。国というものを栄えさせるのは他でもなく、皇帝なのである。その信念と在り方は、母后を通して次の御門（皇太子）へと受け継がれていく。

〔九〕群書治要といふ文を読ませて、その心を御門に教へきこえたまふ。御才のほど、そこひも知らず見えたまふ。国の親と聞こゆべくもあらず、若う、けうらにて、**ただ民安く、国栄ふべきことをのみ聞こえ知らせたまふ**。人々候ひて、日も暮れゆけば、おのおのまかり出づ。（９０頁）

この場面は『群書治要』を用いた教えがどういったものかに注目して読みたい。母后が先に教えるべきとしたのは「民安く、国栄うべきこと」であった。それが何よりも皇帝が大事としてきた事であったのであろう。他の事は後々教えればよく、どんな形で実現するにせよ、その根底にあるべき姿勢を知っておかねばならないと母后は考えたのだろう。

さて、最後に引用するのは、帰国後の氏忠の待遇、及び氏忠の心情である。ここに於いて、作者の唐土という国に対する思いが集約されていると見ることができる。日本という国を出ずにいれば、改めて日本を外から見るような事はない。唐土へ渡って、氏忠は日本に何を感じたのだろう。

〔十〕御門、いみじく待ち喜ばせたまふ。①なかにも**大国にだに許されにける位のほどなれば、**上達部に加はりぬ。参議右大弁中衛中将をかけたり。（中略）心強くふりはへ思ひ立ちし道なれど、②野山の木草、鳥の音まで、恥づかしき目移りの卑しさ、**国のさま、世の習ひ**、（１３３頁）

遣唐使を心から待っていたのであろう、本国の御門の喜びは「いみじ」きほどであった。ここで注目すべきは①の、唐土を「大国」と認めている事にある。唐土のような「大国」でさえ「許され」た官位の格であるのだから、と昇格されるのだが、これを少々深読みしてみたい。この氏忠の厚遇の基はあくまで唐土での昇格にあるのである。もしも唐土で位を貰えてなければ、或いは氏忠は日本で位を貰っていなかったかもしれない。「中でも」とは遣唐使の中でも、という意味に取ることが出来る。他の者に対しては官位を与えていない可能性が存在する。その証拠として、遣唐使として渡った「宰相（安部のせきまろ）」については一切触れないのである。

帰国した氏忠の思いは複雑である。様々な未練を振り払い、強いて船出を思ひ立った帰国の旅路であったのだが、いざ帰ってみて目に映る物は、氏忠に感慨すらも与えない。しみじみと懐かしさすら感じない。唐土という「大国」で見てきた風景、動物、触れてきた人に比べて、なんと見劣りするものであるかと、がっかりしてしまうのだ。そうは言っても、唐土に戻れるわけでもない。心では唐土を思いやりながら、氏忠は日本で暮さねばならない。

こうした氏忠の心情の奥底に母后への思いも混ざって存在している事は言うまでもない。しかしながら、氏忠の唐土への憧れを単純に恋愛感情・恋慕の想いにだけ見る訳にはいかない。恋愛譚が『浜松』に大きく似通ったものであるのに対して、為政者による主人公の好遇と廷臣の嫉妬・謀略の二つの要素が併せて描き出されているのは『松浦宮』独特のものであることをよくよく見なおしていきたい。その独自の要素を物語の中心に据えては、あまりに直接的であり、（成立当時の）執政を非難していると言われかねないだろう。そこで定家は恋愛譚を物語の中心に据えることで、人を才覚によって登用する為政者への憧れを、誤魔化し、隠したのだと、筆者としては考えたいのである。

５．『無名草子』の「もろこし」

『松浦宮』とほぼ同時代に作られたと思われる『無名草子』は、作者、作品の評価を考える上で欠かせない資料であるが、一方で作品の世界観を考える上でも資料として挙げられることもしばしばある。そこで、『無名草子』を媒介として、『松浦宮』の主たる舞台である「唐土」という大地、「唐」

という時代に対する当時の人々の心情を探ってみたい。物語読者という立ち位置から見られる唐土とはどういった世界なのであろうか。

『無名草子』に「唐土」という語が初めて出てくるのは比較的始めの方で、「月」について語る段である。「捨てがたきふしあるもの」として最初に論じられるのが「月」であり、以後「文」「夢」「涙」「阿弥陀仏」「法華経」が語られていき、物語論に移っていくのである。これら「月」以下の六項目は物語を語る上で、好ましい場面を象徴する言葉として使用される。但し、「阿弥陀仏」「法華経」は「仏道」「出家」という言葉から連想されたものであるようだ。

さて、月については「それにとりて、夕月夜ほのかなるより、有明の心細き、折も嫌はず、ところも分かぬものは、月の光ばかりこそはべらめ。」と称賛し、季節を問わず、月明かりの夜は「心なき心も澄み、情なき姿も忘られ」るものであると語る。それは過去・現在・未来にも相通じる事であろうと述べ、さらに遠く隔てた大地でも同じように人の心に入るものであったのだろうと、想像を巡らして語られていく。

〔一〕**まだ見ぬ高麗、唐土も**、残るところなく、遥かに思ひやらるることは、ただこの月に向かひてのみこそあれ。されば、王子猷は戴安道を訪ね、簫史が妻の月に心を澄まして雲に入りけむも、ことわりとぞおぼえはべる。この世にも、月に心を深く染めたるためし、昔も今も多くはべるめり。（１８２頁）

ここに出る唐土は大地、また国、すなわち「昔」の時代の代表として用いられているようである。唐土の人々には触れていない。「王子猷」[11]や「簫史」[12]の名前が出るが、これらは月に纏わる者の例として出されるのみであり、その人間性に話が行く事はない。また、「文」の段でも唐土は出るが、

〔二〕いみじかりける延喜、天暦の御時の古事も、唐土、天竺の知らぬ世のことも、この文字といふものなからましかば、今の世の我らが片端も、いかでか書き伝へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことはよもはべらじ（１８４頁）

それもまた「知らぬ世」を象徴する言葉である。「みつの浜松」の段を見てみよう。

〔三〕唐土にて、**八月十五日の宴**に、『河陽県后』の琴の音聞かせむ』と帝のおほせらるる、御いらへは申さで、あざやかに居直りて、笏と扇とを打ち合はせて、『あな尊』謡ひたるほど、后に御覧じ合はせて、后は我が世の第一のかたち人なり、中納言は日本にとりてすぐれたる人なんめり、と御覧ずるに、『**月日の光**を並べて見る心地して、めでたくいみじ』とおほせられたるほどなどこそ、まことにめでたくいみじけれ。（２３５頁）

と、唐土における場面を称賛している。「八月十五日の宴」とは、中納言の帰国が決まり、唐土の帝が中納言のために開いた宴を言う（『浜松』巻一）。ここにある「月日の光を並べて」とは、月を「河陽県后」に日（太陽）を中納言に喩えての表現である。

〔四〕式部卿宮、唐土の親王に生まれたまへるを伝へ聞き、夢にも見て、中納言、唐へ渡るまではめでたし。その母、河陽県后さへ、この世の人の母に手、吉野の君の姉などにて、あまりに唐土と日本と一つに乱れ合ひたるほど、まことしからず。（２３９頁）

と述べている辺り、『無明草子』作者にとって「唐土」とはやはり異国であることに重要性があるのだろう。「まだ見ぬ」「知らぬ世」を空想し、思い描く心で考えたい作者であるが故に、「夢」や「文」を好み、「月」を媒介にして唐土の人と感慨を共感できる事を喜びとした。作者にとって「唐土」とは、日本と違うことが明らかに、異常に意識されて形作られている世界でしかない。そこには実態をもった人の姿や形もない、あやふやな幻想的な世界である。が、故に見ることも知ることもできる「我が国」と同じように唐土を描くことは許されないのだろう。

『松浦宮』における人間、また人間関係の描かれ方については考察したのであるが、ついでに、風景としての「もろこし」が『松浦宮』でどのように描かれているかを少々見ておきたい。とは言っても、これまで見てきたように、「もろこし」という詞の連想させるものは、人間の「知らぬ」「まだ見ぬ」気持ちであるため、その風景や風情のほとんどが、氏忠の好奇心と共に表現されている。

〔五〕七日といふにぞ、近くなりぬるとて、浦の気色はるかに見え、岩のさま**なべてならずおもしろき**（２９頁）

〔六〕人の語らふ声、鳥のさえづる音も、**見し世に似ずめづらしくおもしろき**に、ゆくへなかりつるながめは、少し紛れぬれど（同）

〔七〕**知り知らぬ秋の花**、色を尽くして、いづこをはてともなき野原の、片つかたははるかなる海にて、寄せ返る波に月の光を浸せるを（３４頁）

〔八〕**さま異なる舞姫ども**数知らず、花のごと飾りて、**えも言はぬ調べ**をととのへ、この国の顔よき人を集めて、（３３頁）

〔九〕同じ月日も、**ところがらは久しき心地するに**、ひとり寝の秋の夜は、まして思ひ残すことなけれども、（４２頁）

総じて『松浦宮』では、唐土の風景は真新しさに溢れ、「おもしろく」「めづらし」きものであった。悪い印象を受けるようなものは全くない。見ることのなかった世界へといざ現実に降り立った時、実感をともなっての感動が氏忠の異国への不安を吹き払っていくのである。「ところがら」によって時

間を長く感じ、秋の夜長が物思いをし尽くす程であるとは、国の違いに幻想的情緒を求める作者の思いが伴った表現であろう。「もろこし」の風情が好印象的に表現されているのは、作者定家が「もろこし」の風景に対して憧れを抱いていたと考えたいが、この「もろこし」の語を定家が和歌でどのように扱っているかを見てから判断しても遅くはないだろう。

６．定家の和歌から見る「もろこし」

定家の和歌の中から「もろこし」を歌うものを抄出し、ここに並べて比較していこう[13]。

①心こそ**もろこし**までもあくがるれ月はみぬ世のしるべならねど（４１番）
②**もろこし**の吉野の山のゆめにだにまだみぬ戀にまどひぬる哉（６４番）
③月きよみねられぬ夜しも**もろこし**の雲の夢まで見る心ちする（６９５番）
④**もろこし**の見ずしらぬ世の人許名にのみきゝてやみねとや思（８５３番）
⑤心のみ**もろこし**までもうかれつゝ夢ぢにとほき月のころ哉（１０４７番）

総じて「もろこし」によって連想されるものは「月」「夢」「心」「見ぬ」「知らぬ」等々の詞である。この辺り、『無名草子』にて描かれる唐土の捉えられ方に通じるものが感じられよう。すなわち、今も昔も変らぬものは「月」であり、変らぬと言っても月が時代を遡る術になるわけでもない。また、唐土は遠距離であり、この目で見ることも叶わず、漢籍を通じて知ることは出来ても、五感で感じ取る事ができない世界である。故に、「知らぬ」世界を表し、それは自然と、「夢」によってしか通う事が出来ない場所として表す事にもなる。如何にも幻想世界として唐土が表現されているのである。

①は月を見ている心情を表す。月を通して古の「もろこし」を思い浮かべ、憧れの気持ちはかの古国へと馳せるものでありながら、それが叶わぬことではある事も自覚しているのである。あこがれと現実の対比を以て、遣る瀬無い気持ちを表現するものだ。

②「もろこし」に吉野の山は存在しないが、こうした用例は和歌史においてごく少数ではあるが存在する。遥か遠方の山に思いを馳せる。現実にはありえぬ山を見たのは夢での話である。夢であるからこそ見えるものである。しかし、その夢にでさえ見たことのないような恋に、今は惑っているのである。現実で夢のような惑う恋に落ち、夢と現実が逆転している。③もまた夢である。月が清くてとても眠れない、しかし眠れない夜であるのに月が心を誘うのか、雲夢の浦の夢を見るような不思議な気持ちがするのである。今自分は起きているのか、それとも幻想的な夢を見ているのか、それすらも判らぬほどに、月に心を惹かれてしまう様を表現している。

④見ざる、知らざる世界の象徴として使われるのが古の「もろこし」である。或いは名を知る事は出来る、或いはその足跡を辿る事も出来る、がそれでも会うことは叶わないのが「もろこし」である。「もろこし」の人に対する憧れに似た恋の悩みを抱いたままで、逢うことない片想いで終らせるつも

りなのかと、切ない恋心を歌う。題詠である。

⑤月を歌う。心は依然として「もろこし」へと思いを馳せるのであるが、どうしたことか夢路でも遠く感じてしまっている。今までは夢路であればこそ行けた筈の「もろこし」が、更に更に遠い存在になってしまう。年月を経たのか、現実世界があまりにも憧れの世界と違ってきて見えたか、その心情は計りかねる。「もろこし」と詠み手を繋ぐものは、「月」のみであった。

⑤まではいかにも憧れとしての「もろこし」が描かれる。和歌である、題詠であると言っても、歌う人間が「あこがれ」を抱いていなければ歌える筈もないのであろう。恋心に繋いで歌われる事が多いが、作者は「もろこし」に憧れを抱いているのである。その心情は時に別の形で歌われる。

⑥秋にたへぬことの葉のみぞ色に出る大和の歌も**もろこし**の詩も（３４３０番）

⑦**もろこし**もこの世もえこそうづもれね野原の塚はあとばかりして（３７２１番）

歌を創作する者、歌人としての意識が強く表された歌である。⑥「秋にたへぬ」という言の葉が色に出るとは、映えて見えるとの意に見てよいであろう。先に見た「もろこし」の和歌に見ても判るように、秋の「月」を見て思い浮かべるものが「もろこし」である。物思いに耽る秋というもので、それは何をしていても想いを馳せてしまうものでもある。堪えようのない空しさを誘う秋を嘆く歌こそが、和歌であっても「もろこし」の詩も、定家の共感を得るものであるらしい。先の「もろこし」の歌が憂いの歌であることからも納得がいく。ここでも「もろこし」は想いを馳せる象徴として撰ばれた詞であるかもしれない。定家にとっては想いを馳せるものと言えば「もろこし」であったのかもしれないのである。

⑦名を残すとは定家にとって関心の的でもあった。歌人としての名、歌の家としての名を残せるかどうかは、定家にとっては此上なく大事なことである。まして「うづもれ」るか否かは、時に定家の心を悩ませもした。しかし、故人は「うづもれ」ずにしかと名を残している。だが、これを感動と取るかと言うとそうでもない。「野原の塚」は「あとばかり」残して、今や見る陰もないのである。いかに著名な人と言っても、今そこにはいない。名のみを残し、生きてはいないのである。故にこの和歌は「無常」と題されているのであろう。荒ぶ風に一人たたずみ、塚の跡ばかり残る野原を見渡す、歌人定家の姿が目に浮かぶ。

「もろこし」の和歌が総体に比べて少ないので、これを以て結論とするのは忍びないが、比較した結果を述べたいと思う。これまで掲げた和歌の内「もろこし」を「あこがれ」としたのは何も定家の若かりし頃でもなく、建久年間においてすらもその傾向が見られる。建仁年間以後、定家にとっての「もろこし」は憧れの対象としてより高みに昇っていった可能性がある。どんなに憧憬の念を抱こうとも、夢でも遠く感じるほどに、届かぬ存在になってしまった「もろこし」を思う定家の和歌には、確かに一種の悲壮感すら窺える。

さて、『松浦宮』と定家を繋ぐ和歌が一つ存在することには触れておかねばなるまい。

⑧たらちめやまだ**もろこし**に松浦舟ことしもくれぬ心づくしに（１８３５番）

この和歌はなかなか難解である。『訳注』では、「わが父はまだ唐土に抑留されて、松浦船が着くのを待っているのであろうか。しかし、船は出ないままに筑紫で心をくだきながら、今年も暮れてしまった」と訳している。遣唐使として唐土に行った「たらちめ」を思う歌と解している。しかし、建永二年と言えば定家も既に「中将」であり、『松浦宮』の成立以後と考える事ができるため、ここにある「松浦山」「もろこし」「松浦舟」は明らかに『松浦宮』を連想させる語群である。樋口芳麻呂氏は、これを『松浦宮』を踏まえた歌と解釈して、「母はまだ唐土に留まる我が子を待って松浦船を見ているのだろうか。今年も暮れてしまった。私の心は松浦山の母の許に飛んで物思いの限りを尽すことだ」と訳しており[14]、筆者としてはこちらに従いたい。恐らくは定家でなくば「松浦」ときて「たらちめ」とすぐに浮かぶまい。樋口氏も紹介しているが、定家はこの和歌を気に入ったのか、『定家卿百番自歌合』の九七番に撰んでいる。

最後に、「もろこし」に思いを馳せる定家の和歌を踏まえて、『松浦宮』の最後の場面をここで見ておきたい。

> 霜月の上の十日なれば、夕べの空は風すさまじく吹きて、おほかたの空の気色催し顔なるに、水の上すさまじかるべきを、ありし釣殿のかたにぞおはしましける。御門の御忌みはてにければ、綾の文などあざやかなれど、異なる色を尽しては、好みたまはぬなるべし。箏の琴掻き鳴らして、ながめ入りたまへる御さま、なほ言ふよしなく、なぞやうち慰みて過ぐしける我が心も、いまさらに悲しうて、ただよよと泣かるれど、見つけられぬぞかひなき。（１３５頁）

「もろこし」にいる母后は、もはや遠い存在でしかない。心の中で憧れていようと、いかに相手の様子を己が知っていようとも、今、その場には存在せず、手を伸ばしても触れることも叶わない。「鏡」を通して見る事の出来る母后の姿は、嘗て会った時のままの美しさをもっている。戻ってきた日本という国は見劣りするような有様であった。益々「もろこし」への思いが募るものの、現実にはその願いは叶わないのである。氏忠は日本で生きるより他はないのである。逢えぬ事を諦めて日本で生きるしかない氏忠にとって、「もろこし」は昔に比べて遥かに遠い存在になってしまったのである。最後の場面は、果たして浪漫的な恋愛の終焉としてのみ見るべきなのであろうか。ここにある悲壮感はいったい何を表現せんと描かれたものであるのだろうか。定家が氏忠に思いを重ねていると考えるならば、定家の母后に求めた姿が「国の親」としての立派な為政者の姿でもあったことに注意を向けねば

ならない。筆者としてはこの悲壮感を、希望の潰えた成立時期の定家の心情そのものであると見たいのである。

7．おわりに

『松浦宮』に先行する遣唐使の物語を読み返し、再び『松浦宮』の本文を読むことで、『松浦宮』のがどのような形で先行物語を摂取し変奏させていったかを見てきた。また、「もろこし」という言葉に焦点をあて、『無明草子』に取り上げられた風景を読み、また定家の「もろこし」の和歌からその心情を読み取りもした。以前、『明月記』に触れながら『松浦宮』を読んだ際[15]、『明月記』や当時の世情から定家の心情を探っていったが、本稿はその補足にもなっただろう。物語が成立したと思われる時期の定家は、世間の自身に対する評価のほどと、なかなか昇進の叶わない自身の政治的地位に対して、表面では自嘲的に流しつつも、その裏では時に嘆き時に憤りを感じながら日々を過ごしていった。本稿で触れた「もろこし」を歌った和歌の数々や、また他にも白氏への敬意を表して創作された「文集百首」などを見ても、定家が如何に唐土に憧れを抱いていたかが理解できる。

もっとも、定家が「もろこし」に抱いた憧れを考えるには、『明月記』における漢籍引用の特徴を読み解く必要があり、これを今後の課題としたい。もちろん、全体としては考察が既になされているものが多いため、どういった観点で引用を読み解き、記事を読むかが鍵となるだろう。漢籍引用の特徴について、たとえば謝奏氏は次のように述べている[16]。

> 定家は、漢籍の校合や書写に高い関心を持ち、病気で動けない時でも書斎にあって身体の苦痛を耐えながら、漢籍の研究を心の慰めや学問的な楽しみとしていた。このような漢学に対する関心は、それが公家文化の権威づけに必要な知識であることは言うまでもない。定家は還暦、経済状態、健康状態どちらにおいても不遇な状況にいる時、これによって生じた失意や不満を表すのに中国典故を多用していた。

定家の「不遇」と「漢籍」、ひいては「もろこし」を繋ぐものがあることは確かなようである。また、こうも述べている。

> 「堯舜」「周孔」「文王」「楚荘王」「斉威王」など中国古代の明君賢士を念願におき、自分なりの君王の理想像を語ったり、名君に恵まれない自分の失意を嘆いたり、（中略）自らの官途においての不遇、貧弱な身体について、漢籍に見える中国の悲劇的人物を譬えにし、自らのことを「趙王遷」「陵園妾」などと重ね合わせ、官位の昇進に執着を抱かずには片時も過ごせない心の焦りや苦しい心情を吐露するなど、これらの面から、定家は学問や政治権威の根源を中国に求めようとする意識が潜んでいることが窺えよう。

これらの定家の漢籍に対する態度を考える時、また「もろこし」という国への切なる憧れの思いを考えるならば、果たして『松浦宮』は日本という国を中国に優るものとして表現したものと言えるのだろうか。一見、「もろこし」にまで霊験ありと伝わる長谷寺観音の名、及び住吉明神が活躍する構造が、日本の優位を表したものであると見る事もできるかもしれない。しかしそれらは所詮典拠に基づいた、物語としての仮の姿ではなかったのではないか。定家の思いは遠い「もろこし」へと渡った氏忠と重なっていったのではないだろうか。定家の理想とする君主に氏忠が逢い、夢のような逢瀬を重ね、そして（定家にはなかった）厚遇を氏忠が受けることは、多少なりとも心の慰めになったのではないだろうか。しかし憧れは、所詮憧れである。如何に幻想の世界を夢見ようとも、夢から覚めれば現実の世界が待っている。故に、定家は主人公に決意させたのではないだろうか。主人公を日本へと戻させ、しかも「あこがれ」の母后の姿も香も残る鏡を手にさせる。いつでも憧れの世界に浸れる術を持ちながら、しかし現実世界に暮さねばならぬという、定家自身が抱いていた諦めと覚悟を、最後に主人公にも与えようとしたに違いないのである。

[1] 拙稿「『松浦宮物語』成立時期に関する再考察～聖代描写を手がかりに～」（『創価大学大学院紀要』第３２号／2010・12）

[2] 樋口芳麻呂 久保木哲夫・校注、訳『新編日本古典文学全集４０　松浦宮物語　無名草子』（小学館／１９９９・５）２３９頁。以下、『無名草子』および『松浦宮物語』の本文の引用は同書に拠る。

[3] 中野幸一・校注、訳『新編日本古典文学全集１４　宇津保物語①』（小学館／１９９９・６）に拠る。

[4] 以下、『浜松』の引用は、中西健治『浜松中納言物語全注釈　上下巻』（和泉書院／２００５・２〔両巻〕）に拠る。

[5] 注４同書の注に「現存本では「はくかん」が多く、「はむかく」は一本（前）のみであるが、後者に該当する「藩岳」ならば唐物語（第二八話・藩安仁の車に道行く女橘の枝を投げ入るる話）などに美男子として描かれる人物に相当し、この文脈にも合致する。「はくかん」の「く」と「ん」は相互に誤写されやすいこともあり、もとは「はんかく」であったとも考えられる」とある。

[6] 久保田孝夫「吉備真備伝と『松浦宮物語』―絵伝から物語へ―」（「日本文学」／平成１０・５）。

[7] 以下『江談抄』の本文は、後藤昭雄、池上洵一、山根對助・校注『新日本古典文学大系３２　江談抄　中外抄　富家語』（岩波書店／１９９７・６）に拠る。

[8] 史実では真備は仲麻呂、玄昉らと共に一度目の入唐を果たしており、二度目の入唐で仲麻呂と再会をするのであって、二人は初対面ではない。説話では初対面かのような表現であるが、二人の関係が踏まえられていないとは言い切れまい。

[9] 森克己「吉備大臣入唐絵詞の素材について」（『新修日本絵巻物語全集６　粉河寺縁起絵・吉備大臣入唐絵』解説所収　／角川書店／１９７７・１１）。なお、森氏は真備が唐人に勝利した『江談抄』の構造について、日本と大陸の「優]越思想が逆転している」として、これが「十一、十二世紀ごろからおこった現象とみなければならぬ」と述べている。

[10] 日本の場面が再び万葉的和歌のやりとりに戻る事を踏まえて、幾つか『万葉集』の例を紹介する。なお、『新編日本古典文学全集』に拠った。人の「忘る」行為を否定的に訴えるものには、人もねのうらぶれ居るに竜田山御馬近付かば忘らしなむか（巻三・８７７）面忘れいかなる人のするものぞ我はしかねつ継ぎてし思へば（巻十一・２５３３）海原の根柔ら小菅あまたあれば君は忘らす我忘るれや（巻十四・３４９８）等があり、一方で『万葉集』には、「忘れない」と決意する男性の歌も存在する。

[11] 王子猷の話は『晋書』『唐物語』等に語られている。月の美しい夜に独りで見る事を良とせずに、遠い道のりを辿って、共に月を眺めようと「戴安道を訪ね」た話が載っている。

[12] 簫史は『列仙伝』『唐物語』等。月を眺めるのは最後の方で、簫史と弄玉が、世の嘲りを気にもかけず、とも

に簫を吹き月ばかり賞でていると、鳳凰に導かれて雲の上に消え去ってしまう。

[13] 久保田淳『訳注　藤原定家全歌集　上下』（河出書房／上巻＝１９８５・３〔初版本〕／下巻＝１９８８・３〔再版本〕（初版本は１９８６・６））に拠る。以下、定家の和歌については同様に、通し番号もこれに拠る。

[14] 注２と同書、樋口芳麻呂「『松浦宮物語』解説」。

[15] 注１に同じ。

[16] 謝奏「『明月記』に見る藤原定家の漢籍受容」（神戸大学国際文化学会「国際文化学」第十三号／２００５）

波線は筆者による。